

## 解答・解説

問1 「この少将をばよき聲とて……伏せたりけるなり」という部分と合致するものを選ぶ。当時の結婚は通い婚で、結婚した女性の実家に男性が通うが、同居することもあった。少将と蔵人の五位は同じ家にいる姉と妹の夫で、「同じ家にあなたこなたに据ゑたりける」とあり、同じ家の別棟に暮らす聲同士であった。「この少将をばよき聲とてかしづき、今一人（＝蔵人の五位）をばことの外に思ひ落としたりければ、妬がりて」とあるのが「蔵人の五位」が少将を呪った経緯。「かしづく」は重要古語で、大切に世話をする、後見をするの意。主語は省略されているが、姉妹の聲をどのよう扱うかを決めるのは姉妹の父親、つまり聲たちの舅である。「妬がりて」の直前の「ければ」で主語が蔵人の五位に変わることには注意。

## 選択肢判定チェック

- ア 舅は少将をよき聲であるとして大切にしていた。(X)  
舅に嫌われていた少将を苦しめることで、舅から気に入ってもらおうとした。
- イ 舅が将来を期待した少将を追い出し、自分が家の財産を独り占めしようとしたという内容が本文にない。(X)  
舅が将来を期待した少将を追い出し、自分が家の財産を独り占めしようとした。
- ウ 舅に大切にされていた少将を攻撃して、舅に愛されない恨みを晴らそうとした。  
蔵人の五位が少将よりも上の地位を目指そうとしたという内容は本文にない。(X)  
舅の尊敬する少将よりも上の地位に昇り、自分を見下した舅を見返そうとした。

よって、正解はウ。

問2 反実仮想の助動詞「まし」を正確に捉える。

「ましかば」「まし」の未然形「ましか」＋仮定条件の接続助詞「ば」。

「ましかば……まし」＝「詛もし」(た)ならば…(た)だろう(に)

「せば……まし」「せ」は過去の助動詞「き」の未然形(の)になることもある。

「昨夜見つけ参らせざらましかば」は、「昨夜呪いを見つけ申し上げなかったならば」「ざら」が打消の助動詞「ず」の未然形。「かやうにこそは候はまし(＝このようであったでしょうに)」の指示語、「かやうに」の内容は「おのれただ今式にうてて死に侍りぬ」を指す。蔵人の五位の味方をした陰陽師のように、少将も呪いの力で死にそうであったことを言っている。

## 選択肢判定チェック

- ア 昨夜呪いを見つけ申し上げなかったなら、この陰陽師も死ななかったでしょうが。  
「かやうに」の内容が「陰陽師が死なないこと」になっている。(X)
- イ 昨夜呪いを見つけ申し上げなかったなら、あなたも死ぬところだったでしように。  
反実仮想の詛「たならば…(た)ならば…(た)だろう(に)」かやうに「の内容があなたが死ぬところだった」になっている。(O)  
現状から未来のことを推量しており、反実仮想になっていない。(X)
- ウ 昨夜呪いを見つけ申し上げたからには、あなたの命はきつと助かることでしょう。  
実際に晴明が呪いを見つけたことにより、少将は死ななかったという文脈と合致しない。(X)
- エ 昨夜呪いを見つけ申し上げていたならば、あなたも死なずに済んだでしょう。  
よって、正解はイ。

## 古文の世界

## 「方塞がり」・「方違へ」と「物忌み」

陰陽師(おんやうじ)「おんみようじ」とも)は、陰陽道に基づいて祈禱や占いを行った専門職で、中務省の役人であった。陰陽道の考えによる風習で重要なのは「方塞がり」・「方違へ」と「物忌み」。「方塞がり」は不吉な方角に進むのを避けることで、そのために目的地へ直接向かわず別の方角の家に泊まることを「方違へ」と言う。「物忌み」は一定期間身を清めて家にこもること。これらはしばしば物語の展開を左右することになったり、不都合なことを避ける方便になったりする。本文に出てくる安倍晴明は、その不思議な力で花山天皇の出家を察知したなど逸話が多い。

出典  
宇治拾遺物語  
説話集。鎌倉

時代の成立。編者未詳。本朝(＝日本、天竺(＝インド)、大唐(＝中国)の説話百九十七編から成る。仏教説話、民間説話、滑稽談など。『今昔物語集』などほかの説話集と重複する内容も多い。

## 「宇治拾遺物語」

解答・解説

文法 Q  
省略 Q  
解答と品詞分解・現代語訳

晴明は「（話を）お聞かせなさい」

あちらこちらに

もうひとり（**蔵人の五位**）をとりわけ（心の中で）見下げていたので、

少将を

りて陰陽師を語らひて式を伏せたりけるなり。さてその少将は死なんとしけるを、清明が見つけて夜二

式神を潜ませたのだった。

陰陽師を説得して（自分の方へ引き入れ）

それぞその少将は死にそう（になろう）とし（てい）たのを、清明が見つけて一晩中

人の五立は

接助 格助 八四用 接助 格助 サ下二用 完用 過体 断終 接代 格助 係助 ナ変末 格助 サ変用 過体 格助 格助 力下二用 接助

## 蔵人の五位は

う四用 存用 過已 接助  
 夜祈りたりければ、  
 代 格助 サ下二用 過体  
 その伏せける陰陽師のもとより人の来て、  
 格助 格助 格助 力要用 接助  
 高やかに「心のまどひけるままに、よし  
 格助 八四用 過体 格助 形ク用  
 折っていたので、  
 その（式神を）潜ませた陰陽師のもとから人が来て、  
 （今少将に話をしているという流れであった）  
 大きな声で「心が乱れたままに、  
 無益に

大きな声で「心が乱れたままに、

無益に

なく守り強かりける人の御ために仰せを背かじとて式伏せて、すでに式神返りておのれただ今式にう

加護の強かった人（少将）の御ために（蔵人の五位の）ご命令に背くまいと思つて式神を潜ませて、（しかしうまくいかずに）  
もはや式神は返つて、私は今にも式神に打たれて

もはや式神は返って、

私は今にも式神に打たれて

助動詞

禁止

・

連用

形

てて死に 侍りぬ。すまじかりける事をし[て]と言ひけるを 晴明、[これ聞かせ 給へ。昨夜見つけ 参らせ

用 援助 力 変用 変用 工事 補完 終 変終  
[ ] 過 體 格助 サ 変用 援助 格助 八四用 過 體 援助 代 力四末 尊用 八四命 尊章 補 力下二用 下二末 謙敬 補

死んでしまいます。 してはならなかったことをして(しまった報いに)と言ったので 晴明は「これ(二目の前の陰陽 昨夜私が、少将に式神が

晴明は、「これ（二目の前の陰陽師の言うこと）をお聞きなさい。  
 昨晚（私が、少将に式神が  
 潜まされていること）を見

つけ申し上げ

<p>助動詞</p>	<p>反実仮想</p>	<p>未然</p>	<p>形</p>	<p>助動詞</p>
<p>終末</p>	<p>援助</p>	<p>形動ナリ用</p>	<p>係助</p>	<p>係助</p>
<p>ざら</p>	<p>まし</p>	<p>かやうにこそ</p>	<p>は</p>	<p>候は</p>
<p>なかつたならば、</p>	<p>あつたでしょうに</p>	<p>(少将も「このよう</p>	<p>(に死ぬところ)</p>	<p>で</p>
<p>助動詞</p>	<p>反実仮想</p>	<p>終止</p>	<p>形</p>	<p>助動詞</p>
<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>
<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>
<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>
<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>
<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>	<p>格助</p>

係助 副 才 過 格 係 八 過  
助 詞 変 終 助 助 四 体  
は や が て 死 に け り と ぞ 言 ひ け る 。  
は その ま ま 死 ん だ と言 っ た 。

単語  
Q  
解答

⑦ (心が) 乱れる。思い悩む。  
行かせる。

① 無益である。無駄である  
② そのまま。すぐに。